

---

# 水龍様の花嫁様

ねむこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水龍様の花嫁様

### 【Zコード】

Z5070Z

### 【作者名】

ねむ二

### 【あらすじ】

私、水野都が寝てる最中にスウェット姿で異世界に召喚された。その理由が「水龍様の花嫁様になるため」とは。腹が減つては戦はできぬと言つし、まずは腹ごしらえか。

「げふう・・・」

べちゃっと顔から落ちて変な体勢で漏れた私の声は、17歳の乙女らしからぬものだった。

「おかわりー」

ばーん！と掲げた空のどんぶりを受け取り、この國の大臣の一人であるインテリ親父はせつせと私のおかわりをよそつている。こいつが今回の元凶だ。

人の寝込みを召喚などというもので呪を起こしてくれちゃって、言うにことを欠いて花嫁様があどうこう見だ、ああ？

ちつと舌打ちして睨みつける。

普段はこのじやないけど、じこく来て性格が凶暴になつた気がする。

「お待たせ致しましたー」

へいこらしながらおかわりを捧げ持つ大臣から満タンになつたどんぶりを受け取り、黙つてかきこむ。

宫廷料理だけあって味はまあまあ。ただし一回一回の量が少ない。

なめてんのか？」つちはまだまだ成長途中だつての。  
むぐむぐと咀嚼して、つうとジュースを飲む。

「ふはーっ！」

どんーとコップをテーブルに叩きつけるよつに置くと、インテリ親父をはじめ広間の奥に控えていた他の大臣たちもわざかに飛び上がつた。

片手でさつと長い髪を後ろに払つて全員を見渡し、鼻の頭に貼つてあつた絆創膏をひとつ剥がす。

「それじゃあ詳しく述べてもらおつかしくらっ！」

一段どころか何段も下にいる人たちを見下ろして、スウェット姿でどつかりと長イスに寝そべる。

唇の端をわずかに吊り上げ、きつめにインテリ親父に視線を合わせると、即座に目を逸らして忙しく汗を拭きだす。  
しまじくして、やつと口を開いた。

「そ、その、た、大変申し上げにくいのですが……」

もじもじと口もる大臣を一睨みする。目が合つてないインテリ親父には効果がなかつたが、奥の人たちには効果があつた。

「…………ひつー」「…………」

短い悲鳴とさうに団子状に身を寄せ合つ様にイケナイ何かに目覚めそうになる。  
ちつと舌打ちをすると、インテリ親父が気づいたらしく焦つたように顔を上げた。

「あーあなた様を水龍様の花嫁様にするために召喚いたしたしだい  
でありますっ！…！」

はあはあと肩で息をしながら、インテリ親父は一息で叫び終えた。

「ふうん。で、その花嫁様つてのは一体何をするの？」

にこーっと笑ひて言えど、広間にいた全員がすゞしい勢いで壁に張り付いた。

どうしてここまで怖がられるのかわからなかつたが、これはこれで実際に面白い。

自然と/or やあつという笑みに変わつて、ついに失神者がでた。  
だから何でだつつーの。

「は、花嫁様は花嫁様です！特に何もすることはありません！ただじつとしていて頂ければ…！」

ははーっと低頭して喋つたのは別の大臣だつた。  
ヒゲが立派なのでヒゲ大臣と呼ぶことにする。

最初に名乗られたけどそんな長いの覚えられるか。

「そんな簡単なことならどうして私なんかを召喚したのかしら？この世界にも女性はいるでしょ？」

ついつとヒゲ大臣から端のほうにいる女性に視線を移す。  
目が合つた途端、顔を真つ青にして俯いてしまつたけど、あの豊かな体つきが男だとは言わせない。  
ほんきゅつほん！な体を上から下まで見回してヒゲ大臣に視線を戻した。

「そつ！それは……！」

頭を上げ拳を口の前にして、あわあわと口を開いたり閉じたりして  
いても全く可愛くない。

ちつと舌打ちをすると、びくつとしてから再び低頭する。

「こ、この世界の人間ではその、少々問題がございまして……」

徐々に尻すぼみになる声でも聞き逃せない一言を聞いた。  
問題？

それを聞こうとしたとき、微かな頭痛がして急激な眠気に襲われる。  
こいつら、薬盛りやがった……

「ですがコルウェン大臣、今回の花嫁様は大丈夫でしょうか？」  
「そうですよ。こんなに力の強い方は今まで召喚した中にはいらっしゃいませんでしたもの。」  
「いや、この睡眠薬は強力だ。一日くらい余裕で眠つていただける  
はずだ。」  
「それなら良いのですが……万が一、水龍様が来られる前に目が  
覚めたりなどすれば……」  
「貴公たちは心配性だな？託宣では水害が起るのは明日だ。どん

なに早くともそれまでに田が覚めることなどありえんよ。」

「・・・そう、ですね。」

「では、あとは水害が起こった後に水龍様をお呼びするだけですね。」

「

「ああ。」

「ええ。」

暗闇の中で気がついた。

体育座りの体勢で何時間眠つてたのか知らないが、関節が固まって体を動かすのが少し痛い。

ちつと舌打ちして、そのへんを蹴りつけたり叩いたりしてみる。少し余裕があるくらいの木箱で、結構しつかりした作りみたいだ。薬盛つたり閉じ込めたり、こんな花嫁に対する仕打ちじゃない一つの。

天井部分をコンコンと叩いてから押し上げる。

釘などで打ち付けられてたら終わりだ・・・が、予想外に軽く持ち上がった蓋をそのままにして立ち上がる。

あたりは満月の光を浴びて明るく、森に囲まれた湖面がきらきらと輝いてとても幻想的な様子だつた。

今ならファンタジーも信じられる気がする。

蓋を頭の上に持ち上げたまましばらく見惚れていると、右手の茂みから乾いた音が聞こえてそっちを振り向いた。



茂みの奥からふらふらと現れたのは一人の色白な青年だった。  
木箱の蓋を持ち上げたままの私の姿が見えていないのか、ぼんやり  
したままこっちに歩いてくる。

水色のひらひらとした丈の長いワンピースのようなものを着ている  
10代後半から20代前半の彼は裸足だ。  
まさか変態か。いや、もしかしたら健康に良いと思つてやつてるか  
かもしれないし、私も裸足だし。

それに裸足くらいなんだ。きっとこうのを美形つていうんだ。  
でこの真ん中で分けた、さらさら流れの薄氷色の髪は足首まである  
けど不気味じやない。

目の前まで来た異様に整つた顔をまじまじとじつとこれでもか  
と見つめる。

やつと気づいたのか、夜の湖面を思わせる藍色の瞳が自信なさげに  
ゆらゆら揺れて

「う、めんなさこ、めんなさこ、めんなさこ…」

はつはつと半泣きで後退しながら謝つてくる青年の左腕を、蓋をぽ  
いと放り出してしつかりと掴む。

「何を、謝るのかしりっ..」

ん?と顔を近づければひここつーと[冗談のよつな悲鳴を上げてしま  
がみ込む。

この世界、ほんとどうなつてんのか知らないけど人を化け物みたいな目で見るんじゃないわよ。まったく。

青年の左腕を掴んだまま木箱から片足ずつ出で、彼の前に同じようになしゃがむ。

口元で握った右手の影で、あつあつと口が開いたり閉じたりしてい る姿は・・・断然可愛い。

ヒゲ大臣なんて思い出したくもないけど、目の前の彼は比べ物にならないくらい可愛い。

凝視しながら覗き込むと、ぺたんと尻餅をついた彼がぼたぼたと涙を流してえぐえぐ言つてる。

これじゃあイケナイ何かに目覚めても誰も言えないと。

少しだけ呼吸を乱してさらに近づくと、彼もわずかに後退しながら緩く首を振る。

「い、生贊な、んていつ、ませ、んから、帰つて、くださり、  
いつ・・・」

ぐしゅぐしゅ目を擦りながら嗚咽を漏らす。

その中でとても重要で聞き逃してはいけないキーワードを聞いたような気がする。

「ねえ。私は水龍様とかいつの花嫁らしいんだけど、生贊つて、  
関係ある?」

うふふと笑つて聞くと、青年が憚いたように仰け反つて目を見開く。驚きすぎたのか、最後の涙が一滴伝うとひっくと肩を揺らして泣き止んだ。

「いつ、生贊のことつ、を、にんげ、んは、花嫁、つて、呼ぶ・・・

「

涙は止まつたものの、しゃくりあげながら蝶の姿に 萌え る！  
再びはあはあしながらゆづくつと近づく。

「その生贊をいらなこつて言つあなたは、水龍様なのね？」

違うつて言つても構わない。

それに確信のようなものもある。

湖の近くに現れた、こんなに青系で揃つた色使いの美形が一般人でいいわけがないのだ。

へつへつへ、と舌舐めずりする。

「や、そうですー。」めんなさいーーー端の水龍で「めんなさいーーー生きてて！」めんなさいーーー！」

んぐんぐと再び泣き出し、服と髪に邪魔されてつまへ後退できない水龍様。

たまんない。

本能と理性の天秤が、拮抗する間もなく傾いた。

本能の方に。

お皿の底が土台にめり込むくらいの勢いで。

「それじゃあ私が水龍様の本物のお嫁さんになつてあげるね？」

腕を放し、にこにこしながら華奢そうな水龍様に飛びつく。

一瞬ぽかんとした水龍様が、骨折もぐえつとか間抜けな悲鳴も上げずに反射的に抱きとめてくれた。

座つたまま呆然としている水龍様の皿元に残つた涙をペロつと舐めとる。

特にこれといった味はしなかつたが、くすぐつたそうに身を捩つた

水龍様は超絶可愛い。

でもすぐに何をされたのか気づいたみたいで、ぱっと首まで赤くなつた。

「あ、あの、その・・・」

遠慮がちに離れようとする水龍様にしつかり抱きついてこいつと微笑むと、そわそわとあたりに視線を彷徨わせながらまたも涙田になる。

やっぱたまんない。

こんな可愛い水龍様を放つとくなんてできるはずもない。

そこで気になるのが生贊の存在だ。

どんな存在で何回接触したのか。

水龍様の胸にすりつきながら考える。

まさか工口方面じゃあるまいな。

「ねえ水龍様？」

笑つて見上げると、水龍様がどぎまぎしながら赤くなつた。

「え、と、あの・・・僕、そんな様をつけてもらつれるようなものじや、ないから、その・・・」

ちゅうとだけ俯いてもじもじとしながら赤くなつて、ひらひらと下から見るよつこしてからちゃんと田を逸らす。

「ほ、僕のこじまつるって、その、呼んでくれたら・・・」

いつかを見なこよつこしてるリルの赤いほっぺに手を添える。

「リルかあ、可愛くてあなたにぴったりね。私は都みやこ、これからよろしくね？」

少しだけ背筋を伸ばしてリルのほっぺに軽く触れるだけのキスをした。

とたんにさつきより赤くなつてわたわたしているリルは、やはり口方面に疎いのではなかろうか。

「それでね？リルにとつて生贊つて何？ないと困るものなの？」

やつぱり生贊＝食事？

生贊を食べるのかどうするのかなんて知らないけど、食事以外でリルに近づくものは排除しよう。

女性は特に念入りに。

骨の髓まで後悔するくらい。

左の人差し指でリルの胸に渦巻きを描きながら、拗ねたようにちらつと見上げる。

目が合つた瞬間、真つ赤な顔でぎゅっと皿を瞑つたりルが両腕を掴んできてそこから離そうとする。

でもね、これくらいで私が離れるわけないでしょ？

はうはう半泣きになりながら真つ赤な顔を逸らしているリルを見て顔がにやける。

「い、生贊は、その、人柱のよつなもんなんだ。水害が起こつたときには、水龍が鎮めるための・・・」

徐々に腕の力を緩めて、どこか落ち込んだようなリルもそれはそれで頭を撫で回したいくらいに可愛い。

それにもリルの言う通りならリルは今回の生贊、つまり私を食べるかどうにかして水害を鎮めなければならないのでは？

「じゃあ・・・リルは私を食べて、水害を鎮めるのね？」

寂しそうに尋ねると、う、と詰まつたリルがちらりと視線を向けてくる。

何？隠し事してるなら後で酷いよ？

「その、ミヤーハは食べない、よ。僕は生贊なんか、食べたくないんだ・・・」

「でもそれじゃあ水害が・・・」

「うん。だからその水害が起じる前に止めにきたんだ。」

そつと立ち上がりうとするリルから下りて、一緒に立ち上がる。満月の下、リルの視線が夜の湖を見つめ生温い風が吹き抜けると私の緊張感も一気に高まった。

大きな湖の中心で、最初は静かに、そしてどんどん多くなる泡がたてるブクブクという音がここまで聞こえてくる。

湖の中心が泡ごと盛り上がり、黒くうねるようにながら持ち上がりしていく。

その塊が巨木ほどの高さに達したとき、天辺から水を割りながら一つの影が現れた。

それに対抗するよつに、リルも風をまとつて水龍の姿に戻つていく。東洋の龍のように細長い体に艶やかで滑らかな氷のような水色の鱗。角はガラスか氷でできているかのように青く透き通り、たてがみは薄氷色で黒い縦長の瞳孔を持つ目は藍色だった。

耳と思しきところは大小の氷柱のようなものが幾重にも扇状に広がつていてる。

『はじめて私はファンタジーを信じた。

湖の上に浮かぶ、一匹の小さな飛び魚とさほどどの水龍を見て。

『もうやめるんだ！』

リルの必死の説得が始まる。

『はん！止められるもんなら止めてみやがれ！その大きれ、生贊も食つてねえんだろ？この激弱水龍が！！』

『なつ！？』

なーるほど。喋る飛び魚のおかげで理解した。  
つまり生贊を食べないと水龍はとても弱いのか。  
でも生贊ってどうやって選ばれる？選挙か？召唤か？

『お前が食わねえなら俺が食つてやつるつ……』

『あ、とす、スペースードで迫ってきた小さな飛び魚を見て、リル  
が焦った顔をした、よつて思つ。

『逃げてー！ヤロー！』

顔色が変わったようなリルを見て、目前に迫った小さな飛び魚を見  
る。

拾つておいた木箱の蓋をその横つ面に叩きつけると、木箱の蓋に負けた小さな飛び魚は綺麗な直線を描いて地に落ちた。ぴくぴくしている飛び魚を拾い上げ、木箱に入れて蓋をする。

『・・・えーーっ！？』

やはり生贊はそれなりに力があるものが選ばれるようだ。

水害を阻止したことにより、私がリルに食べられる理由が完全になくなつたわけだから・・・

にやりと小さく笑つて、後ろで驚いているリルを振り返る。

「リル、大丈夫？ 怪我はない？」

心配げに空中に浮いているリルを見上げると、ふわっと人の姿になつたリルが傍に駆け寄ってきた。

「僕のことよつもミヤコの方が危なかつたんだよ！？」

「うん、とっても怖かつた・・・リル・・・」

リルの胸に縋りつくと、少し迷つたらしいリルの手にそつと抱き締められた。

顔をうすめて、にやあつと笑う。

やはり愛は種族の違ひさえ簡単に凌駕するのだ。

「リル、これからも一緒にいてね？」

「う、うん。ミヤコは僕が守るよ・・・！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5070n/>

---

水龍様の花嫁様

2011年2月4日04時18分発行